

同志社大学在職中の岡道男さん

松本仁助

岡道男さんの思い出については、その主なことは、「若い頃の岡道男さん」『西洋古典論集』XI号、岡道男教授退官記念号、京都大学西洋古典研究会、1994に述べています。が、そこに記されていない、しかも殆ど知られていないことで、岡さんとわたしにとって大切な思い出があります。そしてこの思い出に岡さんの学問についてのすぐれた見識と筋を通そうとする強い性格が示されているのです。それを以下に少し書いてみます。

1961年の秋わたしは首を長くして待っていた岡さんからの航空便を受け取りました。それは、松平先生の許可を得てわたしが岡さん宛に出した手紙の返事でした。その内容は、ドイツでの留学期限が過ぎれば、同志社大学のドイツ語研究室に赴任して欲しいというわたしからの願いにたいする返答で、わたしの希望をかなえてくれるということでした。そして岡さんらしく、すでに履歴書、業績書なども添えてあり、業績そのものはわたしに整えてくれるようにと依頼され、返事をするのが遅くなったことを詫びておられた。後で岡さんから聞いたところでは、岡さんの返事が遅くなった理由は、当時彼の留学先であったマインツ大学西洋古典学教授のマルク先生から留学を延長して学位を取得しないかと言われていたので、同志社大学に勤めるのがよいのか、学位を取得するのがよいのか迷ったためであったそうです。

岡さんは返事をすると同時に帰国の支度をされ、船に乗られた。当時は、ドイツの奨学金で留学する場合、一月ばかりかけて船でヨーロッパを往復することもあったのです。わたしの方は、岡さんの人事についてすでにドイツ語研究室の主任教授から了解を得ていましたので、すぐにドイツ語の教務主任に岡さんの履歴書、業績書および業績をわたして所定の会議に岡さんの件をかけて貰うよう手筈をとりました。すぐれた経歴と業績をもっている岡さんのことから、この人事はスムーズに運び、岡さんが神戸に着いた時には、教授会、評議会の承認も得ておりました。この報告を兼ねて、わたしは岡さんを迎えに神戸へいき、そこで始めて岡さんのご両親にお目にかかったのです。

こうして岡さんは、翌年の4月から同志社大学に勤務されることになりました。

た。そして岡さんはわたしと同じようにドイツ語研究室に所属しました。もちろん岡さんはドイツ語を教えました。が、その頃丁度これまで非常勤として同志社大学で、神学部、文学部の英文科、文化学科の哲学、文化史専攻の学生にギリシャ語、ラテン語を教えておられた田中秀央先生が退任され、さらに英文科の教授として言語学を受け持つと同時にギリシア語、ラテン語を田中秀央先生と一緒に教えておられた岩倉具実先生が大阪外大に転任されましたので、岡さんとわたしがギリシア語とラテン語を担当することになり、岩倉先生の言語学は英語学の教授が引き受けることになりました。この他に以前は一般教育科目と言われていた科目に「文学」というのがあり、この「文学」のなかの西洋古典文学を岡さんとわたしが交代で担当することになりました。

こうして二年ぐらいたった頃でしょうか、当時同志社大学の文学部長をしていたW教授が、突然この一般教育科目の「文学」を見直したいということで、「文学」の担当者を招集して、「文学」検討委員会という会議を開きました。「文学」担当者は日本文学、英米文学、独文学、仏文学、中国文学、スペイン文学、ロシア文学、西洋古典文学の専門家でありました。W文学部長は、「一般教育科目のうち人文科学部門は文学部が責任を負っている。それで、部長のわたしはこの際、「文学」については各国文学の担当者がばらばらになって好き勝手な、いい加減な文学の講義をするのはやめにして、一人の担当者に責任をもって文学というものを教えて貰うことにしたいと思うが、どうですか」というような内容の提案をしました。

これには出席者は皆反発し、陰悪な空気になりました。「一人でいろいろな国や地域の文学を教えることなど不可能だ」、「責任をもってやらせたいという一人の人とは誰ですか」、「先に人を決めた後で科目を置いたり、無くしたりするのは本末転倒だ」というような意見がつぎつぎと述べられました。これにたいしてW教授も、「京大の文学部では文学概論を一人の教授がやっている」、「文学というものを教えるには一人の人のほうがよいのだ」というような主張をしていました。その時岡さんは、「文学作品は個別言語によって創作されるものであり、具体的な各文化圏の作品に基づいてしか文学というものは説明できないし、文学の本質も把握できません。この点から見ても有力な文化圏の文学を講義するように科目を設置している現在のカリキュラムは優れていると思います」という意味の道理のある意見を述べられました。これに加えて、「ばらばらになって好き勝手な、いい加減な講義をしているというのはわれわれを侮辱している。専門科目の講義はいい加減でないと断言できるのか」

というような過激な発言も出てきました。こうなるとW教授も引き下がらざるをえなくなりました。この結果一般教育科目の「文学」はこれまでどおりの担当者によって講義されることになりました。だが、W教授が「文学」を担当させようとした一人の人とは、事実かどうかわからないのですが、どうもわれわれのよく知っているある有名人ではないかということでした。

その後1965年4月から66年3月まで岡さんはマインツ大学の客員教授として同志社大学を留守にしていたが、その間にヴェトナム戦争は拡大し、それと連動して日本の学生運動も激しさを増していきました。同志社大学もその例外ではありませんでした。同志社大学の学友会は当時反日共系の社学同がすべての役職を占め、日共系の民青は反主流派に追いやられていました。だが、両者共アメリカ帝国主義とそれに追随する日本資本主義を攻撃していたのは、他大学の学生運動とおなじでした。

しかし、この学生運動も1968年になると様相を変え、東大医学部の学生処罰に端を発した教授会と学生の対立が東大全体の紛争になってしまい、6月には全共闘が結成され、校舎は封鎖されて講義がおこなわれなくなりました。この全共闘運動は全国の大学に広がっていき、反日共系の学生運動と連動して大学の戦後教育を批判し、主だった大学の教授会を攻撃するようになっていきました。

ちょうどこの1968年秋、正確に言えば10月13日（日）、14日（月）に日本独文学会秋季大会が同志社大学で開催されることになっていました。会場の提供と世話は同志社大学のドイツ語研究室が行うのでありますが、大会の運営は日本独文学会京都支部の役員が担当していました。ところで、この秋季大会は一つの問題を抱えていました。それは、旧東独から独文学教授が招待され、大会で講演を行うことになっていたことです。この講演は、学生運動がそれほど激しくない頃に、開催校同志社大学の了解を得て学会の機関で決められており、手続き上何の問題もありませんでした。ところが、日が経つにつれて大学紛争が激化し、同志社大学における全共闘および反日共系の学生と日共系の対立ものつびきならないものになってしまい、全共闘と反日共系の学生から妨害を受けないでこの講演が無事に終えられるか不安になってきて、ドイツ語研究室でもこのことを私的に話し合っていて心配する教員が増えてきました。

しかも、ちょうどその頃8月20日に旧東独軍が先頭になり、旧ソ連、東欧5か国の軍隊すなわちワルシャワ条約軍がチェコスロバキア領内に侵入しまし

た。アメリカとNATOは動かず、チェコスロバキアはワルシャワ条約軍に蹂躪され、プラハの春はあっけなく終わりました。このために西側世論はワルシャワ条約軍に強く反発し、チェコスロバキアに深く同情しました。このような状況になると、問題の講演会を行って貰うのがよいのかどうかを開催校として同志社大学のドイツ語研究室は検討する必要があるのではないかという意見が多くなってきました。わたしもそれを強く主張した一人でした。こうしてドイツ語研究室は講演会の問題を討議することになりました。

この時にドイツ語研究室の教務主任をしていたのが岡さんでした。岡さんの司会のもとに会議が始まり、講演会を行うか中止するかについて意見をかわしました。会議での意見は二つに分かれて対立しました。一つは、「講演会は、同志社大学ドイツ語研究室の了解を得たうえ、学会の必要な手続きを経て決められているのであり、学生の暴力を恐れて講演を中止するようなことはすべきでない」、あるいは、「学問は純粋なもので、この原則にたってイデオロギー的な見方を排除し、妨害しようとする学生は説得して講演を行うべきだ。また、この講演に反対するという学生の声明も出ていないから、講演が粉碎されるかどうか分らないではないか。それなのに講演を止めようというのは、早まっているのではないか」というような主張で、それは会議において決められたことを実行すべき教員として、妥協を排して真理を追求する研究者として当然述べられるべき正論でありました。

以上の講演開催賛成の意見に対して、もう一方では、「全共闘、社学同の動向は把握できないし、講演妨害の危険性などないとは言いきれない、もし東独教授の講演が学生に妨害されれば、東独教授に大変な迷惑をかけることになる」「いや、これがもとで紛争になり、それがさらにエスカレートして大学封鎖にでもなれば、独文学会の開催を引き受け、講演会を了承したドイツ語研究室は同志社大学当局に申し開きが出来ないばかりか、責任の取りようさえないではないか」というような大学紛争の状況を心配する立場から、「大会期日は迫っており、突然であるけれども、この際講演を辞退させて貰ったらどうだろうか」という意見が述べられました。

前者は、学会の決定と研究を重視する立場であり、後者は同志社大学を紛争から守ろうとする立場でした。両者はなかなかその立場を譲らず、議論も激しくなっていました。しかし、当時の諸大学の紛争状況や「たしかに学問は純粋であるべきだが、そのことを今のイデオロギーに囚われた学生たちに説得することは殆ど不可能なことでしょう。学問の純粋さは学問を担う人間の心掛け

次第で決まるのではありませんか」という岡さんの重みのある発言が、過半数のドイツ語教員に後者の立場を取らせることになりました。

こうしてドイツ語研究室は、教務主任の岡さんに旧東独教授の講演を辞退したいという決定とこの決定を得るに至る事情の説明を添えた書面を日本独文学会会長宛に送って貰うと同時に、独文学会の京都支部にも連絡して、これにたいする返答を待ちました。

だが、日本独文学会長からの返答は、講演を行わせて貰いたいということであり、京都支部も講演を実行するよう要請してきました。こういう事態になって、岡さんは、再度ドイツ語研究室会議を開き、日本独文学会長の返答にどう対応すればよいのかを相談しました。講演賛成派は、先にも述べたように、学会の決定に基づく学問活動が学生の暴力に屈してはならないという主張をしていたのですから、一度講演を拒否したけれども、上部組織の日本独文学会と京都支部が再度講演を依頼してきた以上、下部組織の同志社大学ドイツ語研究室はこれを引き受ける義務があり、学生には全力を挙げて説得にあたり、講演を成功させるべきだという意見を強い調子で述べました。

ところが、講演反対派の不満は、開催校が自分の大学の事情を最もよく知っていて、講演は危険であると判断しているのに、日本独文学会や京都支部が講演をするように要求していることでした。仮に日本独文学会が責任を持つといっても、学生の妨害から講演を護ることはできないでしょう。いや、講演を護るのはむしろドイツ語研究室の役目であるのですが、その自信がまったくないのです。さらに、もし封鎖ということにでもなれば、日本独文学会が封鎖を解除してくれるとでもいうのでしょうか。学会本部のある東大が封鎖されている現状ではないですか、というようなことでした。

一度目とおなじように二度目も講演賛成、反対の意見がそれぞれ述べられましたが、二度目の会議では賛成派が多数を占め、同志社大学ドイツ語研究室が講演を引き受ける旨を学会本部と京都支部に通知することになりました。だが、ドイツ語研究室は念のため、当時の学長代行に講演についての判断を岡さんを通じて伺いました。代行は時間を貸して欲しいと言われ、思案をしておりましたが、結局ドイツ語研究室の決定を尊重すると言われました。このことを岡さんはドイツ語研究室に報告されたのですが、これを聞いたわたしは、代行が講演によって紛争がおこった場合の全責任を引き受ける覚悟をされたと推察しました。

その後、われわれは毎日学生たち、とくに社学同と全共闘の動向に注意して

いました。そしてその頃は学生たちに懸念されるような動きは見られませんでした。しかし、大会の四・五日前の晩にその時独文学会の京都支部長をしておられた京大文学部教授のT先生から岡さんとわたしが呼び出されてT先生の自宅に伺いました。そこには京都支部の役員をしておられた方が三・四人おられたようでした。すでに長時間経っていますので、記憶が定かではありませんが、T先生は凡そ以下のようなことをその場で話されたと思います。

T先生は、岡さんとわたしに「何度も会議を重ね、それも同志社のドイツ語研究室の了承を得た上で決定した独文学会の大会案に反対し、支部の了解を得ずに講演の辞退を本部に直接求めるとは何事だ」とわれわれ二人が講演の反対をリードしたと見なして叱られました。この後T先生は、新聞の切り抜き一片をわたしら二人に見せられました。そこには「日本独文学会秋季大会が10月13（日）、14（月）に同志社大学で開催され、しかも、そこではチェコスロバキアに侵入した東独からくる独文教授の講演が予定されている。これにたいして同志社大学の学友会はどのように反応するのだろうか。学友会本部のある同志社大学学生会館（烏丸上立売）は、学会関係者から不安の目で見られながら、暮れゆく秋の夕べに静かに佇んでいる」というような意味のことが書かれていました。T先生は「講演に反対するのもしからんが、とにかくお前たちは引き受けたのだから、そのことはもう不問に付すことにしよう。だが、この新聞の記事は何だ。学生を煽動して講演を潰す積もりで新聞は書いているようだ。これをリークしたのは、松本、お前だろう」というようなことを大変な見幕で言われ、新聞を叩きながら、わたしを指さされた。わたしは身に覚えのないことと、懸命にこの疑惑を否定しました。T先生も最後には、「それならお前ら二人が責任をもって学生の妨害を阻止し、講演を実現させるんだぞ。それに岡、お前も大会がうまく運営されるように手伝わなければ、お前の京大西洋古典への移籍にわしは反対するぞ」という意味のことを大声で言われて、われわれを放免されました。この時、わたしは岡さんが京大に採用されることになっているのを始めて知ったのです。

岡さんがこのような一身上の重要な問題を抱えながら、去っていく同志社大学のために彼自身の考えに基づいて紛争が起こらないように懸命に努力され、他の人たちの批判を意に介しなかったことに、わたしは今も非常に感謝しています。ところで開催された独文の秋季大会には結局東独教授は出席せず、東独教授が都合で来日できなかった旨の報告がありました。この1968年度が岡さんの同志社大学におられた最後の年で、翌1969年4月から京都大学に移られま

した。そして大学紛争は同志社大学でも京都大学でも激化し、封鎖へと進んでいきました。

岡さんもわたしも学部は京大独文を出ており、大学院では京大西洋古典文学に籍を置いていました。そして論文も西洋古典文学に関するものを書き続け、マインツ大学の西洋古典学科に留学したりしながら、ドイツ語を職とし、しかも日本独文学会の決定に反対したということが、独文の人たちの反感を買ったのかも知れない、とわたしは今反省しているところです。また、わたしのために岡さんが非難されることもあったのだらうと思っています。岡さんの霊にたいしてここで感謝とお詫びの気持ちを述べさせていただきます。